

平成18年3月期 第1四半期財務・業績の概況（連結）



平成17年8月9日

上場会社名 株式会社学習研究社 上場取引所 東証第一部
 コード番号 9470 本社所在都道府県 東京都
 (URL <http://www.gakken.co.jp/>)

代表者 役職名 取締役社長 氏名 遠藤 洋一郎
 問合せ先責任者 役職名 取締役経理部担当 氏名 中森 知 TEL (03) 3726 - 8111 (代)

1. 四半期財務情報の作成等に係る事項

会計処理の方法における簡便な方法の採用の有無 : 有・**無**
 最近連結会計年度からの会計処理の方法の変更の有無 : 有・**無**
 連結及び持分法の適用範囲の異動の有無 : 有・**無**

2. 平成18年3月期第1四半期財務・業績の概況（平成17年4月1日～平成17年6月30日）

(1) 経営成績（連結）の進捗状況 (注)記載金額は百万円未満を切り捨てて表示しております。

	売上高		営業利益		経常利益		四半期(当期)純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
18年3月期第1四半期	19,299	8.9	1,544		1,596		5,357	
17年3月期第1四半期	21,191	10.4	889		978		1,450	
(参考)17年3月期	93,339		1,948		1,570		1,139	

	1株当たり四半期(当期)純利益	潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益
	円 銭	円 銭
18年3月期第1四半期	50.62	
17年3月期第1四半期	13.70	
(参考)17年3月期	10.76	

[経営成績（連結）の進捗状況に関する定性的情報等]

当第1四半期のわが国経済は、景気の緩やかな回復基調により、企業収益の改善が見られるものの、原油価格や原材料価格の上昇など経営環境は、本格的な回復とは言えないまま推移いたしました。

出版業界におきましては、書籍分野ではヒット作が少ないものの、前年並みの販売額を確保しておりますが、雑誌分野では返品率に改善が見られず、昨年まで牽引役を果たして来た週刊分冊百科の不振等により、厳しい状況で推移しております。

このような状況の中、当グループは既存事業の建て直しと新規事業への取り組みを行う中、子会社である株式会社学研ジー・アイ・シーの抜本的事業再構築の為の関係会社事業整理引当損2,800百万円や、学校向け直販事業の構造改善に着手する為の構造改善費用400百万円を特別損失として計上いたしました。また、今後予想される価格の低下を踏まえ、電話加入権評価損242百万円を特別損失として計上した結果、合計3,461百万円の特別損失を計上しております。

この結果、当第1四半期の売上高は192億99百万円(前年同期比 8.9%)、営業損失は15億44百万円(前年同期に比べ6億54百万円増)、経常損失は15億96百万円(前年同期と比べ6億17百万円増)、四半期純損失は53億57百万円(前年同期と比べ39億7百万円増)となりました。特別損失の詳細については、本日公表の第1四半期業績における特別損失計上に関するお知らせを御覧ください。

なお、当グループは事業の特性から第4四半期に売上が集中する傾向があり、四半期ごとの業績には著しい季節的な変動があります。

事業の種類別セグメントの状況は次のとおりであります。

直販事業は、家庭向け学習教材、文教市場向け学校教材が引き続き低迷した他、幼稚園・保育園市場向け用品・備品類も売上が伸び悩んだまま推移いたしました。直販事業の売上高は4,908百万円(前年同期比 15.7%)、営業損失は911百万円(前年同期に比べ、272百万円減)となりました。

市販事業の書籍分野においては「歩きだす夏」が課題図書に選定され、「あいのり」が好調に推移いたしました。雑誌分野においては「おはよう奥さん」「TVライフ」「週刊パーゴルフ」などは堅調でしたが、「科学のタマゴ」の創刊があったものの、ムック関連本の返品超やネット広告の拡大などによる広告収入の低迷により、厳しい状況で推

移しております。また、玩具市場においても市場環境の悪化から厳しい状況で推移いたしました。市販事業の売上高は7,573百万円(前年同期比 5.7%)、営業損失は849百万円(前年同期に比べ623百万円損失増)となりました。

信販事業は、ショッピングクレジット分野において加盟店への営業促進を強化、また債権管理面においては与信の強化、滞留債権の抑制に努めました。信販事業の売上高は1,647百万円(前年同期比 4.5%)、営業利益は410百万円(前年同期比 15.6%)となりました。

能力開発事業は、小・中学生向け算国英教室や幼児教室は順調に推移しているものの、模試事業や子会社の大学入試事業は、厳しい状況で推移しております。能力開発事業の売上高は3,383百万円(前年同期比 8.5%)、営業利益は56百万円(前年同期比 77.3%)となりました。

その他事業は、ウエルネス事業、ソーシャルアシスト事業等新規事業の採算化の遅れや新販売事業、海外版權事業など低調に推移いたしました。その他事業の売上高は1,786百万円(前年同期比 6.8%)、営業損失は292百万円(前年同期と比べ124百万円損失増)となりました。

(2) 財政状態(連結)の変動状況

(注)記載金額は百万円未満を切り捨てて表示しております。

	総資産	株主資本	株主資本比率	1株当たり株主資本
	百万円	百万円	%	円 銭
18年3月期第1四半期	161,729	41,855	25.9	395.48
17年3月期第1四半期	175,496	45,013	25.6	425.18
(参考)17年3月期	171,297	47,532	27.7	449.11

【連結キャッシュ・フローの状況】

(注)記載金額は百万円未満を切り捨てて表示しております。

	営業活動による キャッシュ・フロー	投資活動による キャッシュ・フロー	財務活動による キャッシュ・フロー	現金及び現金同等物 期末残高
	百万円	百万円	百万円	百万円
18年3月期第1四半期	3,626	89	3,485	23,838
17年3月期第1四半期	3,885	18	3,152	25,962
(参考)17年3月期	7,950	822	10,237	23,779

[財政状態(連結)の変動状況に関する定性的情報等]

当第1四半期における総資産は、前期末に比べ95億67百万円減少し、1,617億29百万円となりました。主な要因は、売上債権回収増による売掛金の減少72億48百万円や、割賦売掛金回収による減少16億58百万円など流動資産が前期末に比べ92億97百万円減少によるものです。

キャッシュ・フローの面では、営業活動において売上債権の減少による資金増加(85億42百万円)があるものの、仕入債務の減少(30億41百万円)や財務活動において長期借入金の返済(47億61百万円)による資金減少もあって、当第1四半期末の現金及び現金同等物の増加は平成17年3月末より59百万円となりました。

[参考]

平成18年3月期の連結業績予想(平成17年4月1日 ~ 平成18年3月31日)

	売上高	経常利益	当期純利益
	百万円	百万円	百万円
中間期	38,000	2,750	8,500
通期	86,700	800	5,050

(参考)1株当たり予想当期純利益(通期) 47円72銭

[業績予想に関する定性的情報等]

なお、上記の予想につきましては、発表日現在において入手可能な情報に基づき作成したものであり、実際の業績は今後様々な要因によって予想数値と大幅に異なる可能性があります。

以上